

# Hearn: the Last Hunter

and other stories

[編] ブラッドレー・ボンド

Bradley Bond

[訳] 本兌有+杉ライカ

Honda Yu+Sugi Leika

妖  
怪  
五  
十  
兩

ハ  
ー  
ン  
・  
ザ  
・  
ア  
ス  
ト  
ハ  
ン  
ター

アメリカン・オタク小説集

あなたのニューロンを直撃する  
試し読み小冊子

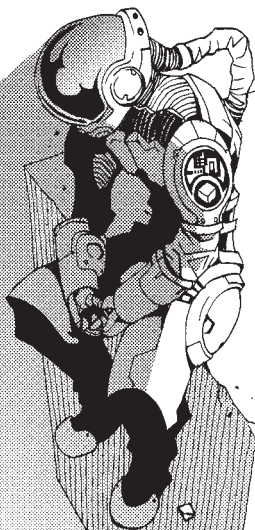
★収録短篇の中から、「阿弥陀6」を一部掲載

# 阿弥陀6

# AMIDA VI

スティーヴン・ヘインズワース

Steven Hainsworth



収録短篇の中から、  
豆腐スペースコロニーの  
せせりょう  
寂寥と狂気を描くSFサスペンス  
「阿弥陀6」を一部掲載します

オカノタノシヤ……ユカリノソノニ……ミトモコノヒト……コイノミズクニ……

「んん」

フロストの目を覚まさせたのは、年代物のレディオオから微かに聞こえる雅楽がくのサウンドだった。視界の横を、小豆ゼリーのパックが漂っていた。銀色の容器は壁に跳ね返り、同じ速度でフロストの後ろへゆっくりと消えていった。

「待った。待った。今何時だ」

欠伸あくびを噛み殺し、右横の計器類を手さぐりする。「13…22 昼」と書かれた表示が優しく明滅している。彼はカレンダーに印をつけた。日課なのだ。二二七七年、三月十四日。とうに使われてないキリスト教暦に換算した日付を、この船はカウントし続ける。

再び跳ね返って接近してきた小豆ゼリーのパックをうまくキャッチし、容器を満たす甘い液体を口をすぼめて啜すすった。

オカノタノシヤ……ユカリノソノニ……運営に苦労していませんか？ ならば、ユタカの理

論へのコミットメント！ これまでのデータでも、顧客の皆さんの実に99・2%が効率改善を  
実感……ミトモコノヒト……コイノミズクニ……

「畜生！ せっかくの夢子チャンの歌が台無しじゃねえか！」

フロストは飲み干したパックを握りつぶして放り捨てた。逆さまになりながらレディオオのツマミを操作し、混線してきたコマールシヤル・プログラム短波を排除しようと務める。無駄な努力だった。シズオカ・ソラ宙域に新たに配置された宣伝スフィアの電波は相当に強力だ。ゴテ

ゴテと宣伝パネルを貼り付けた醜怪な鋼鉄の球体はここからも視認できる。

「毎日！ 毎日！ 毎日！」

フロストは叫び、その場でぐるぐると回転した。ここでの暮らしもだいぶ雑になってきた。当初は規則正しい生活と筋力トレーニングを心がけていたフロストだが、閉塞感が彼を怠惰に走らせた。宇宙服の下で彼の身体は徐々に怠惰なフォルムになっていった。

滞在期間はきっかり四ヶ月。彼ただ一人で、駒木野<sup>こまぎの</sup>コーポ所有の豆腐ステーション「阿弥陀<sup>あみだ</sup>6」を保安管理し続ける。彼以外の人間との接触のチャンスといえば、三ヶ月目に一度だけ訪れる、老婆の行商人だけだ。割のいい仕事ではあった。なにしろ対人ストレスが皆無<sup>な</sup>だ。しかしそれはそれで別の苦痛がある。閉塞感と時間が停止したような感覚。すぎるべきものが何もない。重力も、時間も、他者も無い……。

「阿弥陀6」の建造年代ははっきりしていない。ロシア製のステーション「コペイカ」に似た二重スピンドル構造を持っているが、曲線の処理はずっと手が込んでいた。一方で内装設備はどこどころ歯抜けのように未実装の機能がある。ブースター付近にはブレイズム国家である日本との関連を思わせる巨大なマニ車<sup>まにぐるま</sup>がほとんどランダムに配置され、推進剤噴射の余波で重苦しく回転する。マニ車はくすんだ金箔で覆われている。

フロストに信仰はない。それでも、マニ車を清掃する時、彼は何ともなく、厳粛な気持ちにはなる。それは彼がよく知らない遠い歴史への畏怖であり、敬意である……。

「そろそろ始めるか、なあ、デインク」

フロストは観念して身体を伸ばし、壁に取り付いた半球のドロイドに話しかけた。

「テイク・トン・トン・テイクテイク」

ドロイドは等間隔で配置された四つのLEDアイを明滅させて応える。

フロストは必要とされるメンテナンスを前にして、気が進まず、仮眠を挟んでいた。しかしあまり長く放置すれば本社にアラートが送信されてしまう。いよいよ尻に火がついた。さほど困難な作業ではないが、彼は豆腐を疎ましく思い、憎んでいた。或いは、恐れてもいた。

フロストは壁を蹴った。自動ドアが開き、通路に誘う。八対の短い足を小刻みに動かしてついてくるデインクと共に通路を真っ直ぐ進みながら、フロストは壁に設けられた監視窓を横目で見る。

窓の中には浸漬液で満たされている。この壁の向こう側の空間が一個の巨大な水槽なのだ。浸漬液の中には等間隔で「芯」となる微細な人工蛋白質の種が浮かんでいる。ごく小さい欠片で、ほとんど問題にならないサイズだ。それらを中心に、豆腐は結晶化する。水槽の中には既に日数が経過した「豆腐の種」も存在している。このまま奥へ行くほどに「年長者」だ。最終的に豆腐は一メートル立方体にまで成長する。それらを収穫し、ケースに梱包する。ケースを和紙でくるみ、純金が含まれた飾り紐で結び、「賀正」の漢字を捺印する。これで「駒木野の豆腐」の出来上がりだ。

駒木野の豆腐は高蛋白質で、味に優れ、毒素を体外へ排出すると信じられている。不老の迷信すらもついてまわる。ブルシットだ……フロストにとって、それは気味の悪い生成物、厄介な

オカラを日がな排出し続ける厄病神ではない。

阿弥陀6の豆腐生成システムはブラックボックス化しており、同じものはこの銀河にもはや二つとない。人工蛋白の粉末をニガリと呼ばれる浸漬液の中で循環させて、長い日数をかけて徐々に結晶を作り出す。阿弥陀6の大掛かりな機械がそれをやってのけるが、他の宇宙ステーションで同じような浸漬液、同じような水槽を用意しても、どういわけか豆腐にはならないのだという。

ゆえに、裕福な者達がこぞってこのブランドを求める。ヴィクトリア時代の長い卓を家族で囲み、駒木野の豆腐にソイを垂らして食べる……それは、ヘリウム3の相場で儲けた所謂「燃料貴族」、月の紛争で儲けた「軍貴族」、スペースコロニーの移民問題で儲けた「奴隷貴族」……そうした成金たちの、格好のステータス誇示の手段なのだ。

「ブルシットだ」

フロストは口に出して呟いた。通路の突き当たりまで来ていた。左を見ると、収穫三日前の、ほぼ成長しきった豆腐がガラス越しに見えた。あれをフロストが食べたことは当然無い。システムの操作方法も彼にはわからない。彼はただの清掃員であり、保守管理の責任者ではないのだ。

「ブルシット。ブルシット」

ディンクがフロストの足元で復唱した。フロストはパネルに手のひらを当てて認証を行い、二重隔壁へ進んだ。

「真空状態を警告します」

耳元でガイド音声が届く。フロストは欠伸をした。背後で隔壁が閉じ、前方で隔壁が開くと、そこはもう宇宙の闇だ。タラップを蹴って、飛び出す。手首からワイヤーを射出する。照準は自動化されている。ワイヤー先端部が阿弥陀6のフックを噛み、フロストがそのまま闇の中へ吞まれてデブリ化する運命を妨げる。一方、デインクは阿弥陀6の船体を這うように移動する。器用なものだ。

ゴン、ゴン。スーツをくぐもった音が伝わる。フロストは圧縮空気を小刻みに噴射した。マニ車はゆっくりと回転している。マニ車は巨大で、距離感が掴めない。誰も見るものがない宇宙の果てで、功德を積み続けるのか。

**スペースコロニー「阿弥陀6」で働く唯一の人間、フロスト。  
彼の相棒であるドロイドのデインク。宇宙での寂莫の日々を  
かき乱すものは何もない…はずだった**

**続きは今すぐ物理書籍版で、『ハーン』収録短篇中で  
指折りのチルアウト展開を見逃すな！**



「ハーン・ザ・ラストハンター」  
筑摩書房特設サイト



ブラッドレー・ボンドの刊行記念  
インタビュー、更なる試し読み  
コンテンツなど続々更新中!

<http://www.chikumashobo.co.jp/special/dhtls/>

ハーン・ザ・ラストハンター 筑摩書房 検索



最新情報はこちらでチェック  
@CHIKUMADHT